台湾における高齢者の就労と就労意識
——高齢者の事例分析を通して——

A Study on Elder Employment and the Idea of Ongoing Employment
"A Case Study of the Elder in Taiwan"

范　　蓓　怡*

Pei-Yi Fan

（要旨）

少子高齢化に伴い、高齢者就労が進展するのは一般的である。高齢化社会に突入した台湾では高齢者就労の必要性が高いにもかかわらず、就労率は極めて低い。更に早期定年退職という現象も出てきている。本稿では、高齢者の就労状態と就労意欲を軸にして、就労意欲類型を作成し、高雄市と高雄県における高齢者の実証的な調査結果を用いて、4つの類型を規定する家族構造（居住状態）と価値意識を明らかにした。それには、以下のような特徴があった。

①多くの台湾高齢者は就労意欲を持っているが、積極的に就労行動を取っていない。それには「雇用環境の厳しさ」と「伝統的な価値意識」とが深く関係している。②家族を大切にする台湾高齢者にとって、親子同居・別居という居住状態が就労行動に大きな影響を与えている。「無職意欲型」と「就労離脱型」は親子同居する者に多く、「就労意欲型」と「就労無欲型」は別居する者に多い。③多くの台湾高齢者は「親に仕送りをするのは当然である」、「含飴弄孫」などという伝統的な価値意識を持っていると考えられているが、実際には経済的に自立する傾向が強くなっている。④行動様式と居住状態は高齢者の生活満足度と密接な関係がある。「就労意欲型」と「就労離脱型」は職場活動、社会活動における満足度が高いのに対して、「就労無欲型」と「無職意欲型」は家庭活動における満足度が高い。⑤近代化に伴う家族構造の変化によって、台湾高齢者の価値意識や行動様式は内向き（家族志向）から外向き（職場・地域社会志向）へと移行している。

以上のことから、将来的には、台湾高齢者は「就労意欲型」と「就労離脱型」が増えていくと予測されるため、高齢者の就労と社会参加を促進する必要がある。

1　はじめに

近年、人口の高齢化という問題が世界の国々で注目されている。2006年の台湾の高齢化率は10.0%で、高齢人口が大きな割合を占めている。そのため、高齢化は社会現象として注目され、特に医療や介護などの問題が取り上げられてきた。しかし、これらは後期高齢者の問題で、医療や介護などの問題が強調されすぎるならば、高齢化社会に明るい未来を想像することは難しい。近代化とともに、高齢化問題は避けては通れないとすれば、前向きに解決方法を探す必要がある。高齢化社会では、労働力の不足と社会負担の増加という問題が生じる。元気な高齢者の能力をうまく活用すれば、単に労働力の不足を解決するだけ

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

Journal of East Asian Studies, No.6, 2008.3.(pp.107-123)

でなく、高齢者自身も社会に役立つことを通して、自己肯定できると思われる。

台湾の現状に関して、『老人状況調査報告(2005：73)』は、50歳以上の40.0%が定年退職後の経済生活は現在より少し厳しくなり、さらに5.0%は非常に厳しい状況に陥ると指摘しており、台湾高齢者は定年後も経済生活を維持するために、働き続ける必要があるのである。また、1949～1959年（第二次世界大戦後のベビーブーム）生まれの台湾の団塊世代は、やがて定年退職期に入る。その際、労働市場に労働力不足という問題が生じることとなり、台湾高齢者の就労は高齢者自身の問題だけではなく、社会全体の問題になってくる。

急速な高齢化によって、高齢者自身の自立のための施策が急務であると共に、生活を支援することを考えなければならない。前掲の報告書（2005：2-3）によれば、台湾高齢者の理想的な生活は、60.19%の人たちが「子供たちと同居する」ことである。また、台湾の65歳以上の高齢者の経済生活を支えているのは子供(51.72%)で、次は政府からの補助金[1](22.58%)、退職金・年金及び貯金(17.35%)で、最後が仕事からの収入(8.35%)である。台湾の年金制度の現状を簡潔に言えば、特に優遇されている公務員[2]を除いて、一般の60歳以上の高齢者[3]は受給していない。そのため、台湾高齢者の５割は老後生活の収入を子供からの援助に頼っている。一方『国民生活状況調査報告(2005：86)』によると、25～64歳の約８割の台湾人は国民年金制度[4]に賛成している。すなわち、高齢者は子供への依存度が高いのに対して、若者は高齢者に自立してほしいと思っていることがわかる。

産業構造の変化とともに、伝統的社会から近代的社会へと大きく変化する中で、家族の崩壊がめまぐるしい今日、台湾高齢者は「子供への依存」から「自立」への切り替えを余儀なくされ、よりよい老後生活のために働かざるをえない状況に置かれるであろう。

また、Ryder（1988）が提出した３つの高齢者の生活資源の出所[5]という視点からみても、台湾高齢者は子女からの仕送りが少ない、貯蓄率が低い、年金制度が整っていない、と３つの要因のすべてを満たしていない。生活していくために高齢者は就労の必要性があるにもかかわらず、就労率は極めて低い。加えて、早期定年退職という現象も出てきている。

本稿の目的は、高雄市と高雄県における高齢者に対する実証的調査結果を用いて、台湾高齢者の就労と就労意識を詳しく分析することで、台湾高齢者にとって好ましい高齢社会の構築を提示することである。具体的には、就労行動と就労意識を規定する家族構造と価値意識を解明するものである。

2　先行研究の考察

従来の高齢者就労とその関連要因に関する研究は、経済的な面と精神的な面から論じてきたものが多い。高齢者就労に関連する規定的な要因についての研究の多くは経済的な視点を重視している。つまり、高齢者は自身の経済的な生活を維持するために就労するというのである。この視点からは、年金制度と高齢者の就労とは緊密な関連があることは否定できない。このような経済的な視点から論述した知見はもちろん重要であるが、社会学的関心からは、経済的要因以外の社会構造的要因と意識的要因と高齢者の就労との関連が重要な課題になる。そこで、ここでは価値意識と就労・不就労という行動様式との関係を考察していきたい。

2．1　価値意識に関する先行研究

多くの研究者は「高齢者とは均一な一つの集団ではなく、個人差が大きいことを前提にしなければならない集団である」と捉え、高齢者の就労・不就労に言及する際、ほとんどが個人的な要因を強調してきた（柴田博・長田久雄　2003：214/田尾雅夫ほか　2001：4/嵯峨座晴夫　1999：17）。しかし、定年後の台湾高齢者には積極的に職場活動に参加するという傾向が見られないのは個人的な要因以外に、雇用環境や社会文化的背景、価値意識などが大きく関係していると思われる。人間の行動様式はその社会文化的背景の変化、価値意識などによって左右されるのはいうまでもない。その価値意識は時代とともに変化しつつあるため、それは高齢者の就労・不就労という行動様式の指標になってくる（林顕宗　1994：14-15）。定年後の就労・不就労には、高齢者の就労意識と価値意識が大いに影響を与えていると思われる。

「他の民族に比べ、中華文化圏の人たちの顕著な特徴は『家族集団主義』を重んじていることである」と指摘するものが多い（Freedman, M. 1979）。黄光国（1995：276-338）によれば、「家族集団主義の影響で、台湾人は職場においても、家族（或いは親族）と他人を区別し、何事に対しても、家庭生活を優先し努力する傾向にある」。すなわち、良い家庭生活を構築することは職場で努力する主な原動力になっている。このことから、家族は何よりも大切な集団であるために、家族のためならどのような努力もするということが理解できる。就労動機や目的価値のいかんを問わず、「家族」は仕事に専念することを促す重要な要因なのである。このように、家族を大切にする台湾高齢者にとって、家族が高齢者の就労を支持するかどうか及び高齢者の持っている家族意識は、彼らの行動様式に影響を与えると思われる。

2．2　台湾高齢者の就労・不就労に関する先行研究

台湾高齢者の就労・不就労に関して、唐学斌（1984）は高齢者就労の要因は主に「精神的要因（47.81%）」、「経済的要因（27.41%）」、「健康要因（19.74%）」であるのに対して、不就労の要因は「仕事が見つからない(27.92%)」、「健康状態がよくない（27.50%）」、「子供からの仕送りがある（20.92%）」、「職場のポストを若者に譲る（20.92%）」と述べている。鐘兆恵（1986）の研究によると、働く意欲がある高齢者は35.4%であるが、それは性別、年齢、健康状態、経済状態と関係している。彭錦鵬（1989）の研究では、定年後の就労・不就労は年齢、省籍、学歴と関係しており、主な就労の要因は「健康の維持」と「精神的要因」と答えた者が7割以上を占めている。蘇文璽（1992）の研究では、19.7%の高齢者が「定年後まだ働き続けている」と答えている。その理由は「時間を潰すため(32.5%)」、「基本的な生活を維持するため（27.0%）」、「その仕事が好きだから（23.8%）」である。それに対して、不就労の要因は「働く意欲がない（36.6%）」、「就労チャンスがない（25.1%）」、「健康状態がよくない（22.1%）」、「家族が支持しない（9.7%）」である。呂桐蕊（1993）の研究では、高齢者の就労動機は個人差が大きいが、「家族要因」、「社会的要因」、「経済的要因」と関係している。そして、仕事は高齢者の健康の源であるが、台湾高齢者は無償労働よりも有償労働に意欲が強いと指摘した。林顕宗（1992）の研究では、台湾高齢者は働きたい者は多いが、実際に働き続ける者は少ない。また、全就労者の中で、経済的な生活を維持するために就労する者はわずか2割である。このことは、台湾高齢者

は「精神的に満足できる」、「生きがいが得られる」などの精神的要因で就労している者が多いことを示唆している。更に、許忠信(2003)の研究は、高齢者の幸福感と社会離脱感の間に負の相関のあることを示した。つまり、社会離脱感が強ければ強いほど、幸福感が低くなる。そこで、高齢者の幸福感を上昇させるために、社会参加(職場活動或いはボランティア活動)を通して、社会離脱感を減軽させることが必要であるとしている。

以上の先行研究から、台湾高齢者が就労する要因は「精神的に満足する」、「健康を維持する」、「経済的な生活を維持する」、「暇つぶし」などであるのに対して、就労しない要因は「健康状態がよくない」、「家族が支持しない」などが指摘される。

更に、年金のある教師や公務員の定年退職者は、就労意欲がわりに高く、「精神的要因」と「健康要因」で働きたい者が多いことから、「就労」と「生活満足度」、「就労」と「健康の維持」の間に関係があることは明白である。しかし、高齢者の就労・不就労の要因は論述されているが、高齢者が意欲的に働いているかどうか、すなわち、自発的に働いているか或いはしかたなく働いているかということと、価値意識、家族構造、生活満足度との関係については十分に解明されていない。

3　分析の枠組み

高齢者の就労行動を左右する要因として価値意識に着目することは重要である。

伝統的な儒教倫理の影響で、台湾高齢者は家族を大切にする価値意識を強く持っているはずである。そのため、台湾高齢者が就労・不就労という行動様式を取ることと高齢者自らの価値意識とは関係があると思われる。そこで、社会文化背景からみた台湾高齢者の価値意識を知れば、彼らの行動様式が理解できる。本稿では台湾高齢者の価値意識と就労行動の関連性に焦点を絞って分析する。

ところで、高齢者は就労に対して、どのような考えを持っているか、働いている人たちは意欲的に働いているか、働いていない人たちはそのことに満足しているかを踏まえて、就労状態と定年後の再就労意欲を軸にして、図1のような4つの就労意欲類型を設定した。

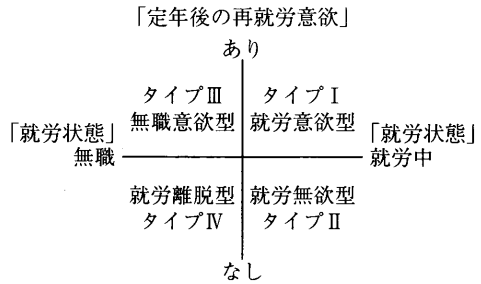

図1　4つの就労意欲類型

「就労状態」は、「就労中」と「無職」を区分した。「就労中」には定年後に再就労している高齢者と定年退職せずに引き続き就労している者が含まれている。「定年後の再就労意欲」の軸は、定年後に再就労したいかどうかで、「肯定(あり)」と「否定(なし)」に区分した。

まず、タイプⅠは現在就労しており、定年を迎えた時、働きたいと思った者で、働く意欲を持って働いているとみて、これを「就労意欲型」と呼ぶことにする。タイプⅡは現在就労しているが、定年の時、再就労したくないと思った者である。働く意欲はないが働いているので、「就労無欲型」と呼ぶ。タイプⅢは現在就労していないが、定年の時、働きたいと思った者で、「無職意欲型」と呼ぶ。最後のタイプⅣは現在就労していないし、定年の時、再就労したくないと思った者である。

表１　年齢別就労意欲類型の構成比率　　実数（%）

	実数	就労意欲型	就労無欲型	無職意欲型	就労離脱型	不明
全体	516	151（29.3）	30（5.8）	223（43.2）	103（20.0）	9（1.7）
60-64歳	295	118（40.0）	20（6.8）	104（35.3）	50（16.9）	3（1.0）
65-69歳	98	120（20.4）	6（6.1）	48（49.0）	24（24.5）	0（0.0）
70-79歳	73	8（11.0）	3（4.1）	43（58.9）	18（24.7）	1（1.4）
80歳以上	35	1（12.9）	1（2.9）	24（68.6）	8（22.9）	1（2.9）

就労から意欲の面でも実態でも離れている状態にあるので、「就労離脱型」と呼ぶ。

2006年に実施したアンケート調査では、「無職意欲型」は43.2%で、最も多く、次いで「就労意欲型」は29.3%、「就労離脱型」は20.0%、「就労無欲型」は5.8%と最も少数であった。年齢別にみた類型には顕著な差異があった（表１参照）。就労行動と価値意識の間には密接な関連性があり、特に「親不幸観」と「引退老後観」が高齢者の就労行動に大きな影響を与えていた。つまり、多くの台湾高齢者は就労意欲を持っているが、積極的に就労行動を取っていないことの主な要因は、彼らの持っている価値意識と密接な関係があることが統計的に明らかになった[6]。

本稿では、台湾における高齢者の就労行動[7]と就労意欲を規定する価値意識と家族構造の相互連関が具体的にそれぞれの高齢者にどのように現われてくるのかをさらに詳細に分析するために、就労経験を持つ60歳以上の高齢者を対象として、事例調査を行った。

4　事例調査の概要

4．1　調査の概要

調査時期：2007年２月～３月

調査対象者：高雄市と高雄県鳳山市[8]に居住する就労経験を持つ60歳以上の高齢者。第一次産業に従事していた者には「定年退職」という考え方はないため、除外した。

調査方法：自由面接法による聞き取り調査

主な調査内容：高齢者個人のライフストーリー（過去と現在の生活状況）、生活満足度、価値意識、家庭生活、親子関係、職場生活など

4．2　調査対象者一覧

（年齢順に表示、氏名は全て仮名）

表２　調査対象者の属性

	年齢	性別	婚姻状態	学歴	居住状態	省籍	就労意欲類型
①王権勇	60	男性	既婚	大学	親子別居	本省籍	就労無欲型
②林文洋	60	男性	既婚	小学校	親子同居	本省籍	無職意欲型
③林信国	61	男性	既婚	専門学校	親子別居	本省籍	就労意欲型
④陳美麗	62	女性	既婚	大学	親子別居	本省籍	無職意欲型
⑤楊秋華	62	女性	死別	小学校	親子同居	本省籍	就労離脱型
⑥王文雄	63	男性	既婚	高校	親子同居	本省籍	就労離脱型
⑦紀玲玲	64	女性	離婚	大学	親子別居	外省籍	就労離脱型
⑧陸家華	64	男性	既婚	中学校	親子別居	本省籍	就労意欲型
⑨曽美芳	66	女性	死別	小学校	親子同居	本省籍	無職意欲型
⑩張敬文	66	男性	別居	大学	親子別居	本省籍	就労意欲型
⑪邱緒章	68	男性	既婚	高校	親子別居	本省籍	就労意欲型
⑫荘文鳳	70	女性	別居	不識字者	親子別居	本省籍	就労離脱型
⑬曽国賢	74	男性	死別	大学	親子別居	外省籍	就労意欲型
⑭沈春美	78	女性	死別	小学校	親子同居	本省籍	就労離脱型
⑮宋博文	84	男性	既婚	大学	親子同居	外省籍	無職意欲型

15名の対象者は聞き取り調査の結果、「就労意欲型」が５人、「就労無欲型」が１人、「無職意欲型」が４人、「就労離脱型」が５人であった。典型的な事例を取り上げて詳しく分析しよう。

5　典型的な就労意欲類型別にみた事例の分析

5．1　就労意欲型

（1）張敬文（一覧表⑩）

張敬文さんは66歳の男性である。現在奥さんと別居しており、子供が２人いる。最終学歴は中興大学卒業である。

張さんは生まれてからずっと高雄市に住み続けている。２年前に定年になったが、現在も仕事をしている。

子供さんは上が男で、下は女である。息子さんは医学に関する仕事（医検師）をしており、娘さんは現在国家公務員受験の準備をしている。子供さんたちは奥さんと一緒に暮らしており、張さんは親友（女性）と２人で奥さんとは別の所で生活している。

張さんは定年前は台湾電力会社[9]に勤めていた。現在も会社は違うが、電力に関する仕事をしている。年金は定年時に一括してもらい（１千万元・約3,500万円）、それに仕事からの収入もあるので、生活には十分である。従って、子供さんたちからの仕送りはない。逆に張さんは別居中の奥さん（専業主婦）に仕送りをしている。定年前の仕事に対しては、お金を儲けられたし、それに生きがいを得られたと評価は非常によい。また、定年前の就労経験が再就労に役立ったし、専門技術と知識を持っているので、現在自信を持って働いていると話した。張さんが再就労している主な要因は社会に貢献できるし、社会との繋がりも持てるからである。

１日の生活は仕事以外、テニスをしたり、テレビを見たり、犬を連れて散歩したりしている。張さんの奥さんたちも高雄市内に住んでおり、車で約30分で行ける。そのため、家族とは別居していても、時々面会のチャンスがある。子供さんたちのことはいつも奥さんに任せているので、張さんとの絆はそれほど強くない。張さんの精神的な支えは一緒に暮らしている女性である。そこで、張さんの生活満足感の源は家庭生活ではなく、主にお金を儲けること、健康、社会貢献である。

現在、張さんの生活は友人関係（社交生活）と職場活動が中心である。今のところボランティア活動に参加する意欲はあまりない。その理由は仕事以外に、友達との付き合いも忙しいので、あまり暇がないからと話した。張さんは、理想的な老後生活は体を大切にして、多くのことを体験する生活を過ごせればよいと言った。

（2）邱緒章（一覧表⑪）

邱緒章さんは68歳の男性である。既婚で、子供が１人いる。最終学歴は高校卒業である。

邱さんは嘉義出身であるが、40数年前仕事のために高雄市に移住してきた。定年前は国家議員の助手をしていた。今年は定年後３年目で、契約（派遣）社員として企業のアドバイザーをしている。その仕事は人脈を利用して探した。定年前の仕事のおかげで、顔が広いために、娘さんも友人の紹介で仕事を見つけた。

邱さんは結婚したが、子供に恵まれなかったので、自分の妹さんの２番目の娘さんを養女にもらった。子供さんは１人しかいないので、大切に育ててきた。その娘さんは去年結婚したので、現在は奥さんと２人で生活している。娘さんはほとんど毎日実家に帰ってきている。娘さんの会社は邱さんの家に近い所

にあるので、昼休みには邱さんの家で一緒にごはんを食べながら、いろいろな話をする。そのため、奥さんは毎日きちんと料理をしている。邱さん夫婦と娘さんの絆は非常に強い。邱さんは「結婚している娘は他人のものである」と思っているので、仕送りをもらわない。しかし、お正月などにはお年玉や小遣いがもらえる。奥さんは専業主婦だったので２人とも年金がなく、現在の主な生活費は貯金と仕事からの収入なので、かなり切りつめていると話した。

邱さんは、定年前の給料はそれほど高くなく、年金もないが、職場で社交的なマナーと人間関係の勉強ができたので、定年までの仕事に対する評価はまあまあよいと言った。今後も仕事をし続けたい意欲を強く持っている。その理由は経済的な面も大きいが、仕事をしていると、生活のリズムを維持することができるし（体によい）、社会との繋がりが持てるからである。邱さんは仕事以外に、クラブ活動、ボランティア活動などにも参加している。生活の中心は家庭生活ではなく、友人関係やクラブ活動である。邱さん夫婦はともに近隣との付き合いと人助けが大好きなため、近所の人気者である。邱さんは将来仕事ができなくなったときは、家庭に戻って、「含飴弄孫」という生活をしたいと言った。現在は中国の台湾系会社のアドバイザーをしているので、ときどき中国に行かなければならない。その間、奥さんが一人暮らしになるので、そのことが少し心配である。だから、もしチャンスがあれば、台湾だけで働き続けたいと言った。邱さんが現在一番望んでいることは娘さんに子供ができることである。

最後に台湾の高齢者政策や高齢者について、邱さんは次のように語った。「台湾の高齢者は就労意欲を持っていないとは言えないが、高齢者にとって、雇用環境が非常に厳しいので、ほとんど就労のチャンスがない。だから、政府は日本政府と同じように計画的に政策を作る必要がある。また、国民年金制度を実施する必要もある。現在、高齢者を対象とした政策が完備していないので、半分以上の高齢者は毎日ぶらぶらして、何もしないまま日を過ごしている。一方、われわれ台湾人の性格はだらける傾向にあるので、意識改革が必要である。ほとんどの台湾人は税金は払いたくないが、年金はもらいたいという悪い考えを持っている。だから、台湾の人々を対象として意識改革をしなければならない」と。

（３）曽国賢（一覧表⑬）

曽国賢さんは74歳の男性である。奥さんは病死しており、子供が４人いる。最終学歴は日本の関西大学卒業である。

曽さんは10年前に定年退職し、現在日本語の教師をしている。２年前奥さんが病死したので、現在は一人暮らしである。子供は娘さん２人、息子さん２人である。皆高雄市内に住んでいるので、週１回会っている。曽さんは子供さんとは別居しているが、関係は非常に良いと言った。子供さんは全員公務員をしており、娘婿の１人は中学校の校長で、１人は高校の教師である。

曽さんは定年前は台湾電力会社で電力技師をしていた。曽さんのお父さんが商売をしていたために、小さい頃から家族全員でずっと日本で生活してきた。そのため、曽さんは北京語と台湾語はあまり上手ではないが、日本語はペラペラである。日本の小、中学校と大学を卒業した。高校時代だけ台湾にいた。台湾電力会社は国営企業だから、曽さんは公務員として定年を迎え、年金は一括してもらった。総金額は約１千万元（約3,500万円）であった。定年前の仕事に対しては、お金を儲けたし、自分の能力が発揮できたので、非常

に肯定的な評価を与えている。5年前に息子さんがマンションを買ったときに少し資金援助した。現在の生活費は曽さんの年金と仕事からの収入で十分足りている。曽さんは経済的に自立できるために、子供さんたちから仕送りはしてもらっていないが、お正月などにお年玉をもらっていると言った。これは勿論子供さんたちの親孝行の表現である。

前述したように、日本語は曽さんの母語で、現在の仕事はその語学能力を生かしている。曽さんは仕事をし続けると、多少お金ももらえるし、時間をつぶすこともできるので、非常によいと思っている。現在の生活にはまあまあ満足している。これからも健康で長生きしたいと願っている。曽さんの定年前の生活の中心は仕事であったため、子供さんたちのことは全部奥さんに任せた。そのため、現在の親子関係は非常によいが、親密さはそれほど強くない。だから、現在の曽さんの生活の中心は友人との付き合いと自分の趣味であるレジャー活動である。理想的な老後生活は、平凡で静かな生活を過ごせればよいと話した。週3日は日本語の教師をし、週1回は高齢者を対象としている総合学習センターの長青学苑で映画を見ている。毎日運動をしたり、DVDで日本の時代劇を見たりしている。奥さんが亡くなったので、料理、アイロンかけ、洗濯などの家事を曽さんは自分でしている。

5．2　就労無欲型

（1）王権勇（一覧表①）

王権勇さんは60歳の男性である。既婚で、子供が2人いる。最終学歴は中興大学卒業である。

王さんは台南県出身であるが、大学卒業後(30数年前)、仕事で高雄市に移住してきた。現在夫婦2人で生活している。2人の子供さんは上は女で、下は男である。

以前はほとんど毎年夏休みに、王さんのお母さん、奥さんのお母さん、子供さんたちと一緒に海外旅行をしていた。子供さんたちが大きくなってからは、そういうチャンスがあまりなくなった。現在、娘さんはイギリスに留学しており、息子さんも台北の大学院で勉強しているため、王さんはまだ定年退職できない。子供さんに仕送りをする必要があるから、仕事をしなければならないのである。王さんの主な生活費の源は仕事からの収入である。昔、「ヤマハ」という日系会社で働いたことがある。その後、独立して自分の会社(測量機械の販売）を経営してきた。最近レストランと健康食品の会社を経営しはじめた。王さんの仕事に対する評価はまあまあで、仕事が好きというよりも、お金を儲けることが好きなようである。言い換えれば、王さんにとって、仕事はただの収入源である。現在就労している理由は前述したように主に経済的な要因である。もし、経済的に余裕があれば、仕事をやめ、奥さんと一緒にあちこち旅行したいと言った。

現在は親子別居であるが、娘さんが週1回電話をしてくれ、息子さんは月1回実家に帰ってくる。親子関係はまあまあであるが、親密さはそれほど強くない。現在の若者は親より友人のほうが大切なようだと言った。将来、もしできれば、子供さんと同居するのが理想である。王さんは「含飴弄孫」というライフスタイルを望んでいるが、それは夢かもしれないと話した。その時は、クラブ活動やボランティア活動に参加することにすると言った。現在の生活満足感の源は家族や親族と一緒にいることである。王さんは大学時代の生活費を全部お兄さんに出してもらったので、お兄さんとの絆が非常に強い。お兄さんも高雄に住んでいるので、王さん夫婦は月に2、3回、お兄さんの家族と一緒に食事をしたり、話を

したりしている。

王さんは伝統的な価値意識を強く持っているが、時代が変化したのだから、多少妥協しなければならないと言った。台湾政府は昔は公務員だけを対象として老後生活を保障していたが、現在は視野を少し広げて、一般労働者も保障する政策を提出した。まだまだ十分ではないが、少しずつ改善されればよいという意見を述べた。

5．3　無職意欲型

（1）陳美麗（一覧表④）

陳美麗さんは62歳の女性である。既婚で、子供が2人いる。最終学歴は東呉大学卒業である。

陳さんは高雄市出身で、ずっと高雄市に住んでいる。12年前に公務員を定年退職した。定年前の仕事に対して、給料がまあまあよかったし、仕事上のストレスがそれほど大きくなかったし、安定した生活ができたので、よかったと言った。ご主人は中学校の教師であったが、やはり定年退職している。最初はときどき夫婦2人で海外旅行したが、定年の2、3年後から、生活がだんだんつまらなくなって、もう一度職場に戻りたいという気持ちを強く持つようになったと言った。

2人の子供さんのうち、上は女で、下は男である。2人とも台北で働いている。だから、現在は夫婦2人で暮らしている。生活費は自分の貯金と毎月受け取る年金である。子供は経済能力を持っていれば、親を扶養すべきであるが、持っていない場合は、親に仕送りをしなくてもよいと言った。陳さんは子供さんたちのために、台北市内にマンションを買った。台北の家賃は非常に高いので、子供さんたちが自分の給料で家賃を支払うのは大変だからである。陳さんは伝統的な価値意識を持っているので、今後できれば子供さんと一緒に生活したいが、現実を考えると、親は妥協しなければならないと言った。

台湾の雇用環境は、「年齢」が大きな制限になっているため、高齢者にとって、再就労は非常に難しい。高齢者と就労の間には乗り越えられない壁があるので、就労したくても、就労のチャンスはほとんどない。マクドナルドか売店で商品を販売するくらいなら就労のチャンスがまだあるかもしれないが、事務職をしたいと思っているので、なかなか難しい。陳さんは日本語を勉強しているが、上達しないので、学習意欲もだんだんなくなった。職場活動からも学習活動からも満足感が得られないので、生活満足度はあまり高くないと言った。また、多くの台湾高齢者は自分の居場所がないので、毎日することもなく、無意味な生活をしている。現在気にかかっていることは子供さんたちはもう30歳代になったが、2人とも結婚する気がないことで、親としてはとても心配していると言った。家庭生活を大切にしたいという陳さんは、子供さんたちと一緒に暮らしたいが、それができないので、仕事をしたいと思っているが、なかなか見つからないと言った。

（2）曽美芳（一覧表⑨）

曽美芳さんは66歳の女性である。ご主人は病死しており、子供が4人いる。最終学歴は小学校卒業である。

曽さんは基隆出身で、ご主人（高雄市出身）と結婚したので、高雄市に移住してきた。ご主人は食品会社を経営していたので、曽さんは子供さんの世話に専念し、専業主婦をしていた。しかし、20数年前ご主人は大腸がんで亡くなった。その時から、子供さん4人を育てるために、曽さんは仕事をしはじめた。

今年は定年後5年目で、現在無職である。定年前は自営業をしていたこともあるし、病

院で介護をしていたこともある。どちらも楽しい就労経験だったと言った。自分の力でお金を儲けたし、職場で多くの人と付き合えたので、定年前の仕事に対する評価は非常によかったと言った。子供さんは4人いるが、現在同居しているのは末子（未婚の娘）である。結婚している子供さんたち（長女夫婦と孫2人、次女夫婦、長男夫婦）は皆近くに住んでいるので、ほとんど毎日実家に帰ってきて、一緒に晩ご飯を食べたり、話をしたりしている。現在の生活にはまあまあ満足していると言った。親子関係は非常に親密である。息子さん夫婦に実家に帰って一緒に生活したいと言われたが、彼等とは生活習慣が違うので、曽さんは断った。親世代と子世代では考え方も行動様式も異なる部分が多いので、別居のほうがよいと言ったそうである。長男夫婦はあまり子供の教育に関心がないために、子供たち（孫）は現在曽さんの家に住んでいる。それは、一緒に暮らしている末子が大学の先生で、子供の教育を大切にしているからである。

曽さんは年金がないので、生活費は主に子供さんからの仕送りである。昔、長女をヨーロッパに留学させた。長女は10数年間オーストリアのウィーンの音楽学院で勉強していたので、非常にお金がかかった。恩返しとして彼女は現在、毎月5万元（約18万円）の生活費をくれる。末子は独身であるが、大学の先生をしているので、安定した給料をもらっている。それで、彼女からも毎月2万元（約7万円）をもらっている。曽さんはそのお金で生活には十分足りていると言った。

5年前に孫の世話をするために、曽さんは仕事をやめた。現在孫たちは幼稚園に通っているので、昼間は曽さんは1人で家にいる。それで、仕事をしたいが、年を取ったので難しいと言った。仕事をしたい理由は人との付き合いが好きだからだが、働けば周りの目が気になる（高齢でも働かなければならないのは子供が親に孝行しないからと世間はみる）し、それに職場のポストを若者に譲るべきであると思っているから、就職活動をしないことにした。現在、午前中は宗教活動に参加したり、運動したり、午後は孫の世話をしたりしている。曽さんは「含飴弄孫」という生活は理想的であると思っている。現在、その理想的な生活をしているので、まあまあ満足している。ボランティア活動や学習活動に参加する意欲を強く持っているものの、運転できないので、結局は何もしていない。というのは、外出する時、いつも末子が車で連れて行ってくれるので、バスであちこちへ行くのは面倒くさいのである。将来就労の機会や学習の機会があれば、もっと豊かな老後生活が送れるだろうと言った。

（3）宋博文（一覧表⑮）

宋博文さんは84歳の男性である。既婚で、子供が1人いる。最終学歴は日本の名古屋大学卒業である。

宋さんは中国から移住してきた元軍人である。家庭環境がよかった（経済的に余裕があった）ために、日本に留学した。台湾に帰ってから電子会社を経営していたが、5年前退職して、現在は娘さんがその会社を経営している。従業員が約380人の中型企業である。宋さんは現在娘さん夫婦と一緒に自分の家に住んでいる。娘さんから生活費をもらっているが、自分の貯金があるので、生活は十分やっていけると言った。

毎日公園で運動し、週2回、車で長青学苑まで奥さんの送り迎えをしている。奥さんが授業をうけている間、宋さんは図書館で新聞を読んだり、散歩したりして待っている。宋さんは定年前に仕事に全力を注いでいたので、

会社が大きくなっていくに従い、満足感と生きがいが得られたと話した。現在の生活の中心と満足感の源は旅行である。老後生活に対する期待は特にないが、自由に自分に合った生活をするのがよいと言った。宋さんは、高齢者にとっては、やはり健康的な生活が一番大切であると言った。現在の生活満足度はまあまあである。特に何も趣味を持っておらず、仕事が趣味のようなもので大好きであったが、年を取ったのでしかたなく定年退職したと話した。

5．4　就労離脱型

（1）楊秋華（一覧表⑤）

楊秋華さんは62歳の女性である。ご主人は病死しており、子供は4人である。最終学歴は小学校卒業である。

楊さんは高雄県出身で、ずっと高雄県に住んでいる。息子さんが3人で、娘さんが1人である。しかし、娘さんは乳がんで死亡、2番目の息子さんは肺がんで死亡、末子は退役の前日に事故で死亡した。ご主人も10年前肺がんで死亡した。現在残っているのは長男ただ1人である。

昔は自営業や売店のセールスマンなどをしていた。売り上げがよくて、仕事からの満足感がいっぱいであった。そして、お金を儲けるのが大好きなので、仕事をするのが好きだったと言った。子供さんを育てるだけではなく、自分のお母さんも扶養しなければならないので、若い頃からずっと家族のために、コツコツ働いてきたが、娘さんが4年前発病したのをきっかけに、娘さんの看病をするために仕事をやめた。娘さんには子供が2人あり、娘さんが発病したとき、孫は2人とも中学生であった。受験の準備がとても大変なので、楊さんは娘さんの代わりに家事の手伝いと孫の世話をした。現在、その孫は1人は大学生で、もう1人は高校生である。楊さんの4人の子供さんの中で、娘さんとの絆が最も強かったので、その娘さんがご主人を亡くした楊さんの精神的な支えであった。娘さんは10数年前から週1回ボランティアをしていたので、娘さんの薦めもあって、楊さんもボランティア活動に参加しはじめた。

現在、楊さんの生活はダンスクラブ、ボランティア活動（長青学苑、病院）などが中心となっている。そして、孫たちの面倒を見ている。同居している息子さん夫婦は仕事をしているので大変忙しい。それで、楊さんは彼らの代わりに、毎日4時半ごろ家に帰って夕食の用意をしている。親子関係はまあまあと言った。主な生活費は自分の貯金である。息子さんは経済能力を持っていないので、仕送りをするのは無理であるが、もし給料が高ければ、親に仕送りをしなければならないと言った。楊さんはそれは親孝行の1つだと思っているのである。楊さんは本当は息子さん家族と同居したくない（嫁姑問題を避けられるので）が、以前娘さんが「お兄さんの給料は少ないので、子供によい教育を受けさせるのは難しいかもしれない」と言ったので、孫たちのためにしかたなく一緒に楊さんの持ち家に住んでいる。

楊さんはお金を稼ぐのが大好きなので、ずっと仕事を続けたかったが、娘さんの病気をきっかけに人生に対する見方が変わった。ほかの人を助けてあげたいという気持ちのほうがお金を稼ぐ気持ちより強いので、現在ボランティア活動[10]に熱中していると話した。それに、毎日忙しい生活をしていないと、この10年間に大切な人を次々と失ったことがいつも思い出されて辛いと言った。楊さんの生活満足感の源は家庭生活とボランティア活動である。高齢になったら、何が一番大切かと言うと、やはり生活的にも経済的にも自立したほうが

よい。そうしないと、人間としても親としても尊厳が少しずつなくなってくると言った。

（2）荘文鳳（一覧表⑫）

荘文鳳さんは70歳の女性で、現在はご主人と別居しており、子供が3人いる。

荘さんは嘉義出身で、学校に行っておらず不識字者である。北京語の勉強をするために、5年前に高雄市に移住してきた。

現在高雄で一人暮らしをしている。ご主人は息子さんの家族と一緒に嘉義で生活している。定年前自営業をしていたので、年金がもらえない。現在の主な生活費は自分の貯金であるが、子供さんからの仕送りも少しある。子供さんと会う機会はあまりない。ご主人と息子さんはいつも、嘉義に戻って一緒に生活しようと言うが、嘉義には高雄市のように高齢者を対象とする長青学苑のような総合学習センターがないので、荘さんは北京語の勉強をするために、1人で高雄で生活している。もう1つ高雄で生活しているわけは、以前、長年ここ（高雄）に住んでいるお兄さんの所に遊びに来たところ、非常に気に入って、老後はここで生活したいと思ったからである。それで、定年後に1人で高雄に移住してきた。現在住んでいるマンションは自分で買った。2人の娘さんはもう結婚している。毎年、お正月には荘さんも2人の娘さんも嘉義の家に帰り、皆で新年を祝っている。

現在は学習活動と宗教活動に熱中している。荘さんは若い時に、一生懸命働いてきたので、もう仕事をしたくない、年を取ってからは自分のしたいことをしてもよいのではないかと言った。荘さんの生活満足感の源は学習活動である。高齢になったら、時間を自由に使えるので、若い頃かなわなかった夢も実現できる。だから、荘さんは現在の生活に満足していると言った。荘さんの現在の生活の中心は北京語を勉強することで、仏典を読めるように頑張りたいと思っている。毎日の生活はほぼ同じことの繰り返しで、午前中は文化センターで宗教活動に参加し、午後は長青学苑で北京語を勉強している。これらを通して、たくさんの友達が作れるので楽しいと言った。

（3）沈春美（一覧表⑭）

沈春美さんは78歳の女性である。ご主人は病死しており、子供が3人いる。最終学歴は小学校卒業である。

台南市出身で、結婚して高雄市に移住してきた。ご主人は10年前、心臓病で亡くなった。ご主人は企業に勤めており、沈春美さんも若い頃からずっと仕事をしていた。

沈さんは日本人の観光客を相手にする免税店を10数年前に定年退職した。現在、長男の家族と一緒に自分の持ち家に住んでいる。年金がないので、生活費は主に自分の貯金である。勿論お正月などに子供さんからお年玉がもらえる。3人の子供さんのうち、娘さんは結婚して台中に住んでおり、次男夫婦は台南市に住んでいる。子供さんたちはお正月、清明節、中秋節などの祝日には実家に帰ってくるが、平日はよく電話をしてくれる。

沈さんの生活満足感の源は社会活動である。仕事が大好きだったが、職場にはストレスがあるし（売り上げランキング）、年も取ったので、仕事をやめた。定年前の職場経験はとてもよかったと言った。職場では日本人のお客さんが相手だったから、日本語が流暢に話せる。日本に対して非常によい印象を持っていると言った。

沈さんは毎日長青学苑に通って、様々な活動に参加している。長男のお嫁さんが沈さんに定年後に何もしないのは体によくないと言ったので、長青学苑の活動に参加しはじめたのである。そして、現在は自分の健康と社会と

の繋がりを続けるために、積極的に活動している。

最後に、沈さんは次のように語った。「政府は高齢者を対象とした国民年金制度を実施する必要がある。政府は元軍人の生活を保障するために、様々な年金や補助金を支給して、更に彼らが死亡した後も、配偶者に半額の年金や補助金を支給し続けている。それに対して、本省籍の高齢者の老後生活を保障する政策はあまりないので、非常に不公平である。政府は台湾人のために様々な政策を実施しなければならない。子供に経済能力があれば、親に仕送りをすることができるが、そうでない場合、親は収入がない。一方、現在子供が親を扶養するのはなかなか難しい。今後、親扶養はもう子供の責任ではなくなるだろう。そのために、年金制度をきちんと整えてほしい。高齢者も自分の老後生活のために貯金を使い、子供たちのために使うことはない。今後、高齢者は自立しなければならないので、昔のように全部の貯金を子供に渡してはいけない」。

6　事例分析の集約

前述した10人の事例を分析した結果、以下のような類型別の特徴が明らかになった。

1.「就労意欲型」はほとんどが高学歴者で、子供と別居している。家庭生活よりも、職場或いは友人との付き合いを中心とする生活をしている。健康の維持、社会との繋がりなどの要因で就労している者が多い。これに対して、「就労無欲型」は高学歴者で、子供と別居している。伝統的な価値意識を強く持っているので、家族を中心とする生活をしている。経済的な要因で就労しているが、やりたいことがあるので、就労に対する積極的な意欲が見られない。「無職意欲型」は高学歴者か低学歴者が多く、子供と同居している者が多い。働く意欲を持っているが、働いていない理由は「年を取った」、「仕事が見つからない」、「世間が気になる」などである。家族を中心とする生活をしている者が多い。「就労離脱型」は高学歴者か低学歴者が多く、子供と同居している者が多い。社会活動や学習活動に熱心な者が多いので、家庭活動以外、地域社会活動を中心とする生活をしている。

2.「就労意欲型」と「就労無欲型」は高学歴者が多く、「無職意欲型」と「就労離脱型」は高学歴者か低学歴者が多い。これをみると、高学歴者は再就労する可能性が高い。また、「就労意欲型」と「就労無欲型」は定年後に再就労する際、自営業をしていた者以外は、広い人脈、専門知識、技術を持っていることが有利な条件となっている。

3.「無職意欲型」は就労意欲を持っているものの、就労していない要因は主に「年を取った」と「就労チャンスがない」の2つである。就労チャンスがないのは、「年齢制限」という厳しい条件がついているからである。「年齢」という規範意識は高齢者に積極的な姿勢を取らせないだけではなく、社会も雇用市場から高齢者を排除するように働くようである。

4.「無職意欲型」は子女からの仕送りを受けている者が多い。このタイプはほかの類型よりも経済的な自立度が低い。

5.「就労無欲型」と「就労離脱型」に比べ、就労意欲を持っている「就労意欲型」と「無職意欲型」は定年前の仕事に対する評価は良い者が多い。従って、定年前の仕事に対する評価と就労意欲は関係がある。

7　結論と展望

事例分析を通して、高齢者の就労行動と就労意欲は彼らの持っている価値意識と家族構造が関係していることが明らかになった。また、事例分析の結果から、アンケート調査ではわからなかった次のような点が明らかになった。

1．親子同居については、4つのタイプがみられる。①子供と同居するのが望ましく、実際に同居している。このタイプは親子関係に対する満足度が非常に高い。②子供と同居するのは望ましいが、子供が実家以外の所で働いているなどの要因で、実際には同居していない。③子供と同居したくないが、子供に経済的な余裕がないので、しかたなく一緒に自分の持ち家に住んでいる。④子供と同居したくないので、別居している。その主な理由は子世代と親世代の間にギャップがあるので、別居すれば、嫁姑問題が避けられる。現在、親子同居と言えば、③のケースが少なくないことから、親子同居は親を扶養する（経済的な生活の面倒を見る）ためとは限らない。

2．かつて成年子女と同居する場合は主に長男或いは他の息子の家族と同居することが一般的であったが、現在は娘の家族と同居するケースが多い。また、親と娘の関係には両極化が生じている。1つは「結婚している娘は他人である」という伝統的な価値意識の影響で、娘との関係は精神的な支えに限られている。他方は近代的な価値意識の影響で、娘との関係は息子と同様に同居してもよいし、仕送りをしてもらってもよい。

3．「親に仕送りをするのは親孝行の表現である」という考え方を依然として持っている者が多いが、これは「親に仕送りをするのは当然である」という考え方が条件付けとなっている。従って、子供が経済的に余裕がない場合は親に仕送りをしなくてもかまわない。更に、子供からの仕送りがある高齢者でも、自立したい気持ちが強くなっている。

4．陳美麗さんの事例から、家族を大切にする台湾高齢者が親子別居する場合は、生活の中心は家庭活動から職場活動或いは学習活動に移行する傾向が見られた。一方、曽美芳さんの事例から、孫の世話をするために、働きたくても働いていない者が少なくないと推測される。更に多くの台湾高齢者は自分の意思に関係なく、家族を大切にする価値意識の影響で、孫の世話をする責任を担わなければならないようである。ここから、台湾高齢者の就労・不就労を規定する主な要因の1つは家族であることが判明した。

今後、台湾の高齢化はさらに進展し、少子化と近代化に伴い、高齢者を取り巻く家族、地域、社会はさらに変動していくことは明らかで、そのいずれもが高齢者の行動様式に深く関わることはいうまでもない。聞き取り調査の分析結果から、「高齢者の就労」及び「家族関係の変遷」に関して、次のような可能性が示唆される。

1．「年齢制限」は高齢者が就労する際、障害になる大きな要因である。これに対しては、2007年5月23日に就労サービス法第5条「就労差別禁止法」が提出され、その中で「年齢禁止法」が制定されたため、台湾高齢者は就労することが容易になるであろう。

2．現時点では、多くの高齢者は家族中心という伝統的な価値意識を強く持っているために、地域活動や職場活動に積極的に参加しない傾向がある。しかし、家族構造の変

化、教育の普及に伴い、近代的な価値意識を受け入れ、意欲的に職場活動や地域社会活動をする「就労意欲型」や「就労離脱型」が多くなると見込まれる。時代の変化とともに、高齢者の生活は「内向き（家族志向）」から「外向き（職場・地域社会志向）」へ移行すると予測される。

3．定年退職金制度と高齢者の就労は密接な関係がある。台湾の現状を見ると、年金がある高齢者に就労を希望する者が少なくない。また、年金のない者は経済的な要因で就労を希望するが、それ以外の要因で就労を希望する者もいる。このことから、就労は高齢者に対して、精神的に満足させる機能を発揮するようである。一方、高齢者数は増加するため、年金制度を整備しても老後生活を完全に保障することは不可能であろう。従って、経済的な面からも精神的な面からも高齢者の就労を促進することは不可欠である。

以上のように、将来多くの台湾高齢者は経済的にも精神的にも自立せざるをえない状況になると思われる。その際問題となるのは、高齢者が就労したくても、社会が受け入れない場合である。老化ということは誰もが避けられないプロセスであるために、人々は思いやりのある態度で高齢者問題を考える必要がある。台湾にふさわしい高齢社会を構築するために、就労意欲のある高齢者を無視してはいけない。また、台湾の社会背景と家族構造の変化は確かに独自性があることは否定できないが、社会全体の変化からみると、他の先進諸国と同様に高齢者に職場活動や地域社会活動を提供することは是非必要である。

謝辞：本稿の作成にあたって、山口大学大学院東アジア研究科辻正二教授と小谷典子教授から貴重なご意見をいただきました。この場を借りて、深く感謝します。

〔注〕

1）補助金制度については、次の種類がある。①「敬老福利生活補助金」：台湾は、日本の国民年金制度に代わるものとして、2002年1月1日から「敬老福利生活補助金」制度を実施している。65歳以上の高齢者には1ヶ月に3千元（日本円で約1万円）が支給される。しかし、次の者は例外である。（i）軍人、公務員、教員、労働者として定年退職した者。（ii）前年度の総所得が50万元以上の者。（iii）低収入者或いは障害者で補助金を受給している者。（iv）個人の総財産が500万元以上の者。この制度の実施期間は将来国民年金制度が実施される前日までである。②「中低収入補助金」：世帯を単位とする総収入が一定の金額に満たない場合に申請できる。③「栄民補助金」：中央政府が台湾に移住する際、一緒に移住してきた軍人の中で、年功が短く、または早期退職したために、軍人（公務員のような）年金を受給できない者を対象に支給している。彼らは「栄民之家」という公立老人ホームに入居ができる。補助金額は月に12,000元（約42,000円）である。④農民福利補助金：65歳以上の農民を対象として毎月5千元（約18,000円）を支給している。

以上の補助金及び定年退職金（年金）は、いずれも重複して受け取ることはできない。

2）公務員の定年退職金（年金）制度は2005年に七五制度から八五制度に変更された。年齢と勤務年数をプラスして85となる場合、定年退職することができる。この制度は2007年から実施される予定であったが、現在60歳以上の公務員は七五制度が適用されている。また、公務員保険の老後年金があり、負担金は毎月本人が35%、政府が65%である。この年金は定年退職時に一括で受け取れる。

公務員の定年退職金に関連して、「18%特優貯金制度」がある。1950年代、公務員の待遇は良くなかったので、1959年（民国48年）に公務員の生活を保障するために、「18%特優貯金制度」が制定された。これは一括払いの定年退職金と老後年金を18%という高い利息で預けられる制度である。しかし、2005年に修正案が提出され、

月払い定年退職金を受け取る公務員が対象となり、金額限定となった。一方、国営企業の公務員は一般の公務員と違い、定年退職時に年金を一括でしか受け取れない。また、彼らにはこの制度は適用されない。

3）旧労働者定年退職金条例によれば、同一企業で15年以上働いた55歳以上の労働者または勤続年数25年以上の労働者は、定年退職金が受け取れる。しかし、この条件に合う労働者はわずか１％である。それは、台湾の企業のほとんどは中小企業（約８割以上）で、中国生産力センターの調査によると、台湾の中小企業の平均操業年数は13年だからである。そこで、2004年旧条例が修正され、新条例となった。この新条例によると、労働者がほかの企業へ転職する場合は、前の年功（勤務年数）を累積することができる。そして、60歳以上の労働者で勤務年数が満15年以上の場合は、月払いで定年退職金を受け取ることができる。しかし、15年未満の場合は定年退職金を一括でしか受け取れない。また、労働者保険の老後年金では、労働者保険局に支払う毎月の保険料は、企業側が70％、労働者本人が20％、政府が10％を負担している。これは、定年退職時（60歳）に一括払いで労働者に支給される。しかし、早期定年退職の場合、退職時には受け取れず、60歳になった時に受け取れる。

このように、台湾の労働者は、定年退職時に２種類の年金を受け取ることができる。１つは、企業側からの定年退職金であり、勤務年数15年以上の場合は、月払いか一括払いか労働者自分で選択できる。もう１つは労働者保険の老後年金で、60歳時に一括で受け取る年金である。

4）台湾の国民年金制度は2007年７月20日に成立した。公務員、教師、軍人及び一般労働者以外の25歳以上65歳未満の国民が対象で、毎月674元（約2,260円）を納入する。40年間納めた場合は、毎月8,986元（日本円で約31,000円）が支給されることになっている。この制度は2008年10月１日から実施される予定である。

5）Ryder は高齢者の生活資源の出所を３つに分けている。まず、「家族内移転」で、主に成年子女からの仕送りである。つまり、親は自分の老後生活のために、子供を大切に育て、成年子女が恩返しとして親を扶養する責任を担う（養児防老）ものである。２つ目は、若い頃から老後生活の準備のために少しずつ貯金し、ライフサイクルの高齢期にその貯金を利用して生活する「世代内移転」である。３つ目は、「社会的移転」で、国家政府の施策により、「老齢年金制度」や「社会福祉制度」などが制定されることによって、高齢者が経済的な保障（所得）を得ることである。

6）2006年８月～９月に実施した「台湾の高齢者の就労意識に関する調査」の調査票を用いて、就労経験を持つ60歳以上の屏東市の高齢者を対象に調査を行った結果である。詳しくは「台湾高齢者の就労意識と価値意識－４つの就労意欲類型による分析－」『やまぐち地域社会研究』第4号15-28頁を参照のこと。

7）本研究では、就労とは「給料がもらえる仕事に就いていること」を指し、いわゆる「有償労働」である。

8）高雄市は台北市に次ぐ台湾で2番目の直轄市である。台湾の南西部に位置し、台湾最大の商港がある。産業構造は主に商工業を中心とし、IT産業がそれに次ぐ。総人口は約151万人で、高齢化率は8.6％である。

高雄県は台湾の南西部に位置し、「高雄都市区」と呼ばれる地域に隣接しており、昔から農業が発達してきた。近代になって、商業や工業や交通が発展した。総人口は124万人で、高齢化率は9.4％である。

鳳山市は高雄県の最も主要な町である。ここには県庁舎をはじめ、児童館、中学校、高校、国父記念館や高雄バスターミナル、ウイメンズプラザ、ショッピングセンターなど県の政治、経済、教育施設、商業施設などの公共施設がすべて集中している。

9）台湾電力会社は中国鋼鉄会社、中国造船会社と同じように国営企業であるが、年金制度は一般の公務員とは異なる。一般の公務員の年金制度では、定年退職時、年金の受け取りを月払いか一括かのどちらかを選ぶことができる。しかし、台湾電力会社の社員は定年退職時一括払いの年金だけである。また、彼らは公務員の「18％特優貯金制度」にはあてはまらない。

10）台湾では、職場活動だけではなく、ボランティア活動などにも「年齢制限」がある。病院ボランティアは65歳前に登録すれば、75歳まで続けられる。しかし、長青学苑は高齢者を対象とした学習総合センターであるために、ここで活動するボランティアには年齢制限はない。元気なうちはいつまでもボランティアを続けられる。

引用・参考文献

[1] Freedman, M. (1979) "The family in China, past and present." In M. Freedman (Ed.), *The study of Chinese society*: Essays by Maurice Freedman. Standford University Press.

[2] Ryder, Morman (1988) "Effect on the Family of Changes in the Age Distribution" P.98-112 in Proceedings of *The International Symposium on Population Structure and Development*. New York: United Nations.
[3] エイジング総合研究センター (1997)『台湾の人口高齢化と高齢者福祉』東アジア地域/高齢化問題研究　平成8年度研究報告書
[4] 柴田博・長田久雄編集 (2003)『老いの心を知る』ぎょうせい
[5] 田尾雅夫ほか (2001)『高齢者就労の社会心理学』ナカニシヤ出版
[6] 嵯峨座晴夫 (1999)『高齢者のライフスタイル』早稲田大学出版部
[7]『公務員退休法』について、http://www.exam.gov.tw/book/book.asp 参照 (2007.5.21)
[8] 台湾内政部主計処 HP：http://www.dgbas.gov.tw/mp.asp? (2007.12.10)
[9] 行政院主計処 (2005)『老人状況調査報告 2002年調査』行政院内政部
[10] 行政院主計処 (2005)『国民生活状況調査報告　2003年調査』行政院内政部
[11] 行政院労工委員会 (2005)『労工退休條例(労働者定年退職金条例)』行政院労工委員会労工保険局編印
[12] 行政院労工委員会 (2005)『労工基準法 (労働基準法)』行政院労工委員会労工保険局編印
[13] 林顕宗 (1992)『高齢者再就業意願之研究報告書』行政印労工委員会職業訓練局
[14] 林顕宗 (1994)『高齢者人力供需状況及其適任行職業別之研究』
[15] 范蓓怡 (2007)「台湾高齢者の就労意識と価値意識-4つの就労意欲類型による分析-」『やまぐち地域社会研究』第4号15-28頁
[16] 黄光国 (1995)「儒家價值觀的現代転化：理論分析與實徴研究」『本土心理学研究』第3期276-338頁
[17] 唐学斌 (1984)「台北市政府退休公務人員生活之研究」『市政建設』99輯台北市政府研考会
[18] 鐘兆恵 (1986)「屏東県三地?老年社會調適與需求之研究」『美和護専学報』第7期1-62頁
[19] 彭錦鵬 (1989)『如何運用退休公務人力資源之研究』台湾省政府研究発展考核委員会
[20] 蘇文璽 (1992)『高雄市老人生涯規画調査』高雄市政府社会局
[21] 呂桐蕊 (1993)『高齢者再就業之研究－以台湾日本為中心』文化大学日本研究所修士論文
[22] 許忠信 (2003)『老年人的生活型態、社会疎離感和幸福感之研究』高雄師範大学成人教育所修士論文